

丈人力のススメ ～未踏の「人生九〇年」を踏破する～

筆名 堀 亜起良 東洋哲学者

元『知恵蔵』編集長 堀内正範 著

目次

その一 「引退余生」でいいか 「現役長生」がいいか

- 一 「人生六五年」から「人生九〇年」へ 3
- 二 「丈人力」を活かす成熟・円熟期 11
- 三 長寿を愛しむ三つの流儀 19

その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

- 一 「しあわせ家族」は外にある 31
- 二 マドギワに居場所をすえる 39
- 三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」 47

その三 生活感性を満たす国産・地産品

- 一 「MADE IN JAPAN」はどこへ行った 56
- 二 途上国産の日用品に囲まれて 67
- 三 アベノミクス+エイジノミクス 75

その四 「地域の四季」を探し求めて和風回帰

一	和風回帰のキイは「季節感」の共有	88
二	春秋のまわり舞台で衣食住を演出	99
三	中心街は「三代四季の情報源」	117
その五	高齢期二五年の居場所づくり	
一	「エイジング・イン・プレイス」での日々	127
二	高齢社会活動の先行的事例	139
三	「新・地域ブランド品」で全国制覇へ	150
四	わがまちの「生活支援コーディネーター」	158
五	仲間+たまり場+まちづくり	167
その六	「人生の達人」としての八面玲瓏	
一	まあ、いいか、でいいのか	176
二	ひとりの住民・市民として	190
三	ひとりの国民として	199
四	ちよつとばかり国際人	210
五	不戦不争の灯かりを伝えて	219
おわりに		
そして「寿終正寝」(天寿)を全うする		222

その四 「地域の四季」を探し求めて和風回帰

一 和風回帰のキイは「季節感」の共有

「二五年＝百季」との豊穡な出会い

*「一年」と「四季」を折節の基準に

どこのご家庭でも、わが家の年中行事として、年末の「除夜の鐘」と年初の「初詣」だけは毎年欠かさず出かけているにちがいない。だれかに背を押されるようにして。かつては親たちといまは子や孫とあるいは夫婦で、一年を振り返るとともに、来る年が無病息災であり安居樂業であるように、定めた寺で「除夜の鐘」を突き、定めた神社で鈴を鳴らして祈っている。

ここではこれまでおざなりにしてきた「地域の四季と行事」を顧みて、これからの晩年期の人生を豊かにする契機として見直してみようというのである。

おざなりに咲く花などありはしないし、おざなりに鳴く虫などいはいはない。

かならず巡ってくる出会いを心待ちすることで、住んでいる地域でしか得られない四季折りの風物がひとしお濃く感じられるようになる。つまり「地域の四季」が、高齢期を過ごす者に等しく与えられている自然からの「天恵」なのだということに思い当たる。

「天災」は突然に襲うが、「天恵」は穏やかに移ろう。「地域の四季」の巡りにある。四季の移ろいに身をゆだねること。それだけで風物は生き生きと変容する姿を現わす。

そのためには、これまでの「一年一二月」だったカレンダーに、意識して「一季三カ月」を重ねて、時節の巡りを三カ月を基本とすること。

時の移ろいの感覚というものは相対的なものだから、ひとつずつの季節をていねいに迎えて過ごすことにより、一年は四倍の長さで変化で感じられるようになる。高齢期人生を「二五年」とともに「一〇〇季」と意識すること。つまり「二五年〥一〇〇季」を上手に重ね合わせることで暮らしに豊かなリズムをもたらすことになる。

たとえば六〇歳から八五歳、あるいは六五歳から九〇歳までの二五年を、「高齢期二五年〥一〇〇季」として捉えて、「一季三カ月」を時節の区切りとして迎えて過ごす。出遅れた人や新たな展開をまじえて、七五歳から一〇〇歳でもいいし、また思い立って独自に始めてもよい。

そんな「百季人生」をこれまでの生活に重ね合わせることで、高齢期を「四倍の豊かな時節の変化」とともに過ごすことができる。日本に生まれてよかった、いいねクリックである。

たとえば七一歳の春季、夏季、秋季、冬季・新年、七二歳の春季・・というふうには。

「地域の四季」の変化と向かいあい、「一〇〇季」のうちの一つひとつをていねいに迎えて過ごす。そう考えただけでも心弾みませんか。弾まないとしたら、まだ洋風な暮らしへの惰性から抜け切れていないからだと自省してみてください。

これまで一年を平板に流していた日々には、四季を基準として「地域の四季」の変化とともに過ごす日々を重ねて、「陽暦」（公暦、グレゴリオ暦）と「陰暦」（旧暦、天保暦）という「双暦」による多重標準を意識して暮らす。これが高齢期の人生を豊かにするのにふさわしい処世法といえるだろう。

「双暦」は、陰暦の明治五年一二月三日を陽暦の明治六年（一八七三年）一月一日とすることで始まったから、わずか一四〇年の経緯である。レベルⅠ（一〇〇年クラス）の大津波であった「文明開化」が、レベルⅡ（一〇〇年クラス）の折々の祭事・行事を崩壊し変形してしまったことに思いをいたそうというのである。

「四季カレンダー」と「床の間春秋」

* 四季を取り込むしかけをつくる

Sさんは六五歳直前の定年待ちの高齢者のひとり。

「改正高年齢者雇用安定法」（二〇一三年四月）によって会社の定年は延びたが、それで新たな心躍るしごとが増えるわけではないし、このまま定年まできちつと与えられたしごとをこなして過ごすつもりでいる。きちつとした高齢社員のひとりであるSさんに、ここでは社内でのことをとやかに聞かない。

しごとの外で心躍ることがあるからいいというSさんのしごとの外のことを聞いてみたい。「心躍るといって大げさですが、季節ごとの催しや、旬の料理づくりや、俳句仲間との吟行旅行や・・です」

ここでのSさんへの本稿の関心は、すでに「一年」ではなく「一季」を基本として暮らしている人だからだ。前章のFさんより一歩先をゆく「四季丈人」なのである。

「四季カレンダー」

民家風のしつらえの居間には、重厚なサクラの机にそろいの「MY・チェア」もある。「四季丈人」のSさんは、「MY・チェア」に座って眺められる壁面に、実用を兼ねてビジュアルのしやれた「四季カレンダー」を掛けている。季節ごとの三カ月のもので、春なら三・四・五月、夏なら六・七・八月というように、四季それぞれ三カ月の日付が視野の中に呼び出されていることに意味があるのだという。

年末恒例の東京銀座・伊東屋の「カレンダー展」などをのぞいても、

「四季カレンダーと称するものはありますが、実際に四季ごと三カ月の九〇日間のものは見かけないですね。あるのでしょうかが目立つほどにはない」

とSさんはいう。お茶の会とかお華の会とか季節に寄りそうような暮らしをしている人びとの需要はあるはずだし、身近にあつていい暦なのだから、いずれはカレンダー会社が競って制作する「季節しごと」になる時がくるのを、あわてずさわがず待っているというのが、Sさん

のひそかな楽しみなのだという。

「四季カレンダー」はカレンダー展でも見当たらないから、例年入手している馴染みのカレンダーを、四季ごとに三カ月三枚を貼り合わせて仕立てている。新年・冬は前年一二〜本年二月、春は三〜五月、夏は六〜八月、秋は九〜十一月、次の新年・冬は一二〜次年二月（まだない）である。だからよく見ると、月と月の間を貼っていて手製であるのがわかるが、離れてみるかぎり、たしかに「四季カレンダー」になっている。

季節行事や旧暦が記されているから、「地域の四季」はカレンダー上に鮮明に表現されている。サインペンの赤マルは、参加する催事や「吟行日」である。

「季節小物」あれこれ

「四季」を取り込む小物や仕掛けを、Sさんは「MY・チェア」に座って眺められるほどよい位置にいくつも配している。年四回の季節ははじめにおこなうモノの配置の「季節替え」（中掃除）を楽しんでいる。三カ月の新しい季節を待つて迎えて送る楽しみである。

花鉢、紋のれん、玉すだれ、星座図、雛人形、五月人形、鯉のぼり、扇絵、風鈴、蚊やり豚、菊人形、丸火鉢といった「季節小物」の置物や飾り物を入れ替えたり移動したりする。季節の移ろいに応じて、住い方にかんする春もの、夏もの、秋もの、冬ものを目立たせるとともに、衣・食それぞれの四季の変化をも楽しんでいる。

「茶道や華道も、そろそろ男性回帰の時期ではないですか」

と、Sさんは文化勃興期の変容は男性が主導するが、完成期以降は形式美として女性が静かに支えるという持論を述べる。茶道や華道も双方とも奥さんより上というのが自慢である。

和装もまたしかりで、これまで主として女性の儀式用の盛装として、技術も意匠も素材も職人によって支えられ保存されてきたが、「季節感と地方性を享受する高齢男性」の登場によって、「モダン変容」をする時期にあると、わが身に引き寄せて熱心にモノ語る。

「床の間春秋」

「どこのお宅にも四季を取り込むために先人が残してくれた仕掛けがあるのに活かされていませんね」

とSさんがいう仕掛けというのは、「床の間」のことである。

和風建築のお宅にはかならず和室に床の間がある。ところが冷暖房機器があつて季節感がない。そこで、軸は年中かけっぱなしの一幅だけになる。これではせつかくの「床」が動かずに惜しい。というより無いに等しい。季節の通風を心がけているSさんとこの床の間は、花の軸を「梅」「牡丹」「蓮」「菊」の四幅をそろえて「四季花軸」としているという。

まずは春秋一幅ずつそろえれば「床の間春秋」が楽しめる。それでも床の間は季節で動くことになる。有名画家のものは高価だから、習作期の画家や素人画家の力作に魅力がある。

「ぶんぶんクーラーを回して密室ですごす無季節、無機質な「常春」指向では「床の間春秋」を楽しめない。人生失格ですよ」

そこまでいいいますか、Sさん。

とって本稿と「左右同源」のご意見だから拝聴する。

「地域の四季」を家庭内に取り込むこと。切り貼りのないしゃれたデザインの「四季カレンダー」が季節の日また一日を伝え、「四季花軸」が床の間を飾り、さまざまに季節小物を配して、繊細に一季また一季を迎えてすごす。Sさんの「和風」意識によって「地域の四季」が率直に素材を提供している。俳人の心が身近に動いているのが見てとれる。

いささかささやかともいえるSさんの人生目標であり「和風回帰」であるが、「地域の四季」を個人的に享受する心意が暮らしの形として息づいているのが当然とはいえ新鮮である。

もうひとつ、Sさんお気に入り「エイジド用品」がある。

テックタック・テックタック振り子が行き来するウルゴスの古時計。静かな室内でも、あるともなくある音がいい。いわれるまでは気づかない。

百寿期の「おおきなのおぼの古時計」とまではいかないが、形と数字の表現に洋風古淡の味がある柱時計である。振り子の音は柔らかく音楽の領域に達している。

「風鈴がうるさいなんていわれちゃうのは、作った風鈴のほうもいけないですね。現代の日本の製品は音に鈍感すぎる。カメラのシャカシャカは最低。記者会見の時のあれがいいという神経がわからない。ライカにはありえない」

あのシャカシャカ音が忘れられないというFさんを思い出したが、これはここではいわない。

古時計の遅れは気がついたところで直すのだという。

傍らにデジタル時計も置いていて、

「二もとの梅に遅速を愛す哉、です」

などと、蕪村の句を挟みながら、Sさんは、新旧の時計の遅速をもまた楽しんでいる。

「祭事・歳事・催事」を心待ちする

*迎えて楽しみ、惜しんで送る

だれもが参加して楽しんでいる「祭事・歳事、催事」を追ってみる。
みなさんどうぞ。

年初の「初日の出」と「初詣で」そして「書き初め」ではじまり、「初荷」「初午」など初ものがつづいて「節分」。春を迎えて「鶯の初音」「ひな祭り」、サクラ前線を追って「お花見」、「入学式・入社式」「端午の節句」に「鯉のぼり」や「新茶つみ」。季節が動いて「しょうぶ湯」「七夕」「お盆」に「夏まつり」、全国各地の「花火大会」や「薪能」。そして「お月見」(中秋名月・十三夜)や紅葉前線を追って「紅葉狩り」、「菊まつり」「七五三」と季節は移って、暮歳の「西の市」「大晦日」・・・。



そんな季節の移ろいの節目を次々に追うのが「二十四節気」。中国の中原地域の生まれなので、すべてとはいかないが、緯度の同じ日本でも多くが実感をともなつてよく知られている。

立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨

立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑

立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降

立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒

八十八夜、入梅、二百十日や、開花日、初鳴日、初見日といった「雑節・生物季節」など。

先人は、それらを合わせて新しい季節の訪れを心待ちして迎えては楽しみ、名残りを惜しんで送って、また来年。人生の一こま一こまを刻んできた。

日本の民衆文芸として親しまれている俳句の季節感を支えるのが「季語」。そこには時の移ろいとともにも動く季節の突っ先をとらえる感性のエキスが詰まっている。

まさをなる空よりしだれざくらかな 富安風生

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男

をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏

湯豆腐やいのちの果てのうすあかり 久保田万太郎

俳句仲間ならだれでも知っているという近代秀句から、「百季丈人」であるSさんに選んでもらった。「折り折りの味わいが巧みに捉えられていいものです」とSさん。ところが、世の実作家からすれば、句はそれぞれいいとしても、この四句を並べて「四季」とするとところが俗にすぎるといふ評になる。季ごとの句をといつて頼んで並べた本稿の軽率さで、Sさんに俗の評を負わせることとなったが、本稿の趣意は次のところにある。

句境には天地雲泥の差があるが、巧拙は風にまかせて、新年・春・夏・秋・冬の五句を「自作春秋五句」として選定して心にとどめておきたい。宗匠の「春秋五句」をうかがっておくと参考になる。句会も一句一句の巧拙を競うだけでなく、「春秋五句」による人生の味わいが加われば深みを増す。とくに気に入った自作のひとつを、ひそかに「辞世の句」として内定しておくのもよい。

一日の課題を「八方時刻」に振り分ける

*三時間ごとにひとつの課題を据えて

国際標準の一日を二四時間に刻んですごしてきたから、一時間の体感はかなり正確にある。日ごろ、テレビの一時番組や十五分ニュースや三分コマーシャルが多くあるから、これらのおおよその長さを体内時計が計算して、日々つつがなくすごしている。

ここではそれに重ねて本稿がみなさんに推奨するのは、三時間ずつ八つの刻みを意識して一日の予定を織り込んでいく「八方時刻」である。

更（ふけ） 〇～三時

明け方 三～六時

朝方 六～九時

午前・昼前 九～一二時

午後・昼過ぎ 一二～一五時

夕方 一五～一八時

晩方 一八～二一時

夜 二一～二四時

八区（八方）に分けることで、ゆったりとした暮らしの日に鮮明な記憶を残してくれることになる。

「更」は五更まであって三更から日替わりだが、夜更けや深更として日替わりの感覚があるので、それをはじめに据える。「明け方」と「朝方」は異論がないだろう。正午をはさんで「午前・昼前」と「午後・昼過ぎ」そして「夕方」を迎える。

そのあと「夜」までの間（午後六時〜九時）を、気象庁は天気予報で「宵のうち」と呼んでいたが、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更した。収まりがよくない。そこで本稿では朝昼晩として実績をもつ「晩方」を据えた。「八方美人」ほど目立ちはないが、「八方丈人」には着実な生活実感がある。

たとえば某月某日。朝方には朝刊を読んで、昼まえには米寿を迎えた先生に手紙、昼すぎには郵便局と図書館へ。夕方にはスーパーへ行ってから夕刊を読み、晩方には晩飯をすませてTさんに電話とFさんにファックス。夜にはEさんへEメールと読書。夜更かしはしない。

日々を三時間ごとの八区に刻んで過ごす「八方人生」には、一日を着実に刻んでいるという充足が感じられる。その間、食事で健康に留意し、読書（朗読）・会話で認知症を制し、歩くことと雑事で行動力を保持して、「体・志・行」三元カテゴリーをバランスよく過ごすことである。

二 春秋のまわり舞台で衣食住を演出

「季節和装」で街をゆく

*モダン変容する「地域和装」

まずは「衣（和装）」の部門から。

「和装」といえば、長着、羽織、帯、野袴、そして足袋、履物。履物は草履、下駄、雪駄。それに襦袢に褌。かずかずの和装小物類、さらに財布や名刺入れ・まだあるが。

「文明開化」によって、支配層だった武士はちよんまげを落とし、洋服姿になって官吏になった。しかし町人、農民、商人、一般の女性たちが洋装になるにはずいぶん時間がかかった。

和洋折衷のところが長かったが、いまや一〇〇%とっていいほど「洋装」である。一〇〇%「洋装」なのに、だれもそれを不思議に思わない不思議な時代。

風土に根ざした衣装としては「洋装」は仮装なのである。

だからぜいたく品ともいえる。わが国の湿気の多い夏の日にシャツとシューズでは暑苦しい。外国から来た人には、クーラーの効いた部屋での「クールビズ」は、ぜいたくなお遊びファッションに見えるだろう。

衣装は風土に似合った「和」と外来の「洋」とが半々くらいでせめぎ合っていたころ、戦前の銀座街頭の写真をみると、和洋ほぼ半々の街着で賑わいがある。

男性の和装もふつうの人のふだん着として似合って登場している。ムリして洋装に凝った男性の風姿のほうに違和感があった。洋装は洋風、和装は和風で、「和洋折衷」の衣装は、街の雰囲気や道ゆく人の心を闊達にしていたにちがいない。

しかし男性の「和装街着」は、さしたるせめぎ合いもなく、洋風のスーツとシューズによって、「モダン変容」の機を得ずに街頭から追放されてしまった。今日では逆に和装の男性はぎこ

ちない。これをなんなのだろうと思う感性を大事にしたい。

いま京都西陣をはじめ各地の衣の産地（秋田八丈、結城紬、桐生織、東京友禅、伊予絣、博多織、久留米絣、大島紬、八重山上布・・）がそれぞれに、地域和装の復興に努めている。競って努めているのだから、伝来の意匠や素材を生かした「季節和装」が、産地の老若男女のふだん着の趣向として街頭に見られるようになるだろう。

衣は「地域の四季」をもっとも率直に表現できる分野。移ろっていく季節に対応する合わせ、単衣、薄もの、単衣、合わせへの次々の変容を、地元の意匠と素材とで繊細にとらえた「地域和装」は、何より肌に心地よく、着けて楽しいもの。地域に残されている意匠や素材は、どんな些細なものでも「四季の衣装」に素早く取り込んで生かすことができる。つまり伝来の形や素材を大切にする地元住民の衣装への熱意と趣向が発揮されるうちに、「地域和装街着」という地域ファッションが各地で成立することになる。

高齢女性の和装ファッションショーとして、その努力はひと足先に始まっている。モデルは「和」の心をもつ高齢女性である。遅れて男性をリードするのは、「洒々落々」と季節ごとの衣装を楽しむ「和装丈人」のみなさんである。

こだわりなく着用して街をゆく男性の和装姿が、僧衣と作務衣だけではなんとも心もとないではないか。いかにも窮屈そうな晴れ着や袴姿ではなく、着付けも自分でできて、カミシモを解いたふだん着への和装回帰が、本稿が希求している衣の情景である。丹後ちりめんの産地で

の「ゆかたを楽しむ月間」などは、いいね、クリックである。

いま東京では、「可愛いくて綺麗なジュニアの「原宿・青山」、自らを知る美しいミドルの「銀座」、そしてしっとり端麗なシニアの「巣鴨」が、街着ファッション三代（三大）聖地になっていて、女性のおしゃれは街なかで競われて変容していく。

季節とのかかわりで身近な素材なのに、「常春型エアコン住宅」の普及で忘れ去られている衣との付き合い方がある。

夏もの・冬ものとの間をつなぐ春もの・秋ものによる着替えへの配慮で、日に一〇度もちがう温度差が生じる「季節変化」に対応した厚・薄、重ね着など、「衣替え」の習慣がないがしろにされてきた。そこで春・秋の時期に体調を崩す高齢者も多い。

「春もの」（これがたいせつ。春・秋を分ける）「夏もの」「秋もの」「冬もの」の四季分類による「四季衣装サイクル」をおこなって、「衣替え」への無関心が原因で起こる高齢者の病気を除去することが可能になる。

「ローカル街着」の国際性

*反パリコレの和装ファッション

ファッション談議は本稿の不得意の分野だが、あえて齒に衣を着せずにいわせてもらえば、

優れたわが国の衣装デザイナー（森英恵、川久保玲、コシノジュンコ、高田賢三、三宅一生、山本寛斉、山本耀司・）は、ヨーロッパのファッション界のために日本的な素材と意匠と才能を提供してきた。

今度はわが国の風土に似合う衣装のために、世界のトップ・デザイナーが、「日本和装のモダン変容」を競う場としての「トーキョー・コレクション」を開催するくらいではないか。そうして初めて、ヨーロッパ中心の「欧装」指向から脱した、おおらかな国際性のある民族衣装の世界が開けてくる。

日本の首相が国連の場で披露するのは、このレベルの和装に達してからがいいだろう。

はっきりと「衣装の多重標準」を意識したステージを演出して、黒人モデルが「欧装」を超脱した「ネイティブ」の衣装を着けていきいきと登場することのほうに、だれしも豊かな国際性を感じるだろう。もちろん、なかに「欧装」も含まれる。いまなら日本シニア・デザイナーの総力で、「トーキョー・コレクション」のステージで、そういう流れをつくれるはずだ。

先にも指摘したが、わが国の衣装としての「洋装（欧装）」は仮装であり、一〇〇%の「洋装（欧装）」を不思議に思わないのは、不思議なことなのである。

「洋装（欧装）」の基本は「北方（狩猟）系衣装」である。だから活動的だし、冬の寒気をしのごにはいいのだが、年中いいわけではない。夏にはもつと夏の風情がかよう「南方（農耕）系衣装」の意匠と素材を採り入れた衣装がいい。

前世紀には、日本和装だけでなく、どの民族衣装も魂を失って「欧装」に取り込まれた。「エスニック」や「サファリ」といった「らしきファッション」がそれで、本国での衣装は、着る側からいって「地域和装」に属する。「欧装」もそのひとつなのである。

なんでも「欧装」がいいというなら、夏祭りのお神輿を「欧装」で担いでみたらいい。

遊牧の民の衣装などは明るくていかにも開放的である。だから外来の賓客を迎える側も「日本和装」で対応するのが自然なのだが、「欧装」の正装に頼っている。お互いにそれを不自然に思わない。ここにも意識して「衣装の多重標準」を率直に活かす転回がありうる。

二〇世紀を風靡したのが「洋風（欧風・パリコレ）」のファッションだった。新たな世紀での世界各地での「地域和風」の登場が次のステップ。晴れの場は東京開催の「トーコレ」である。海外の姉妹・友好都市から素材や意匠を移入して個性的な「ローカル・ローカル街着」をつくり出せば、欧風とは違ったファッションで地域の街が華やぐ。街着は和洋折衷がいい。

「自作旬菜料理」でもてなす

*「厨在丈人」の銘入り出刃一丁

次は「食（和食）」の部門。

「和食」はユネスコの「世界無形文化遺産」（二〇一三年一二月）に登録された。身近な食文化

が注目され評価されたことを、まずはここまで築き上げてくれた先人に報告して喜びたい。

「鎌倉は 生きて出でけん はつがつお」（芭蕉）

なんて旬の旬を口ずさみながら、よく水気を切った旬のカツオの一切れに、香ばしいショウガ・ミソを載せてほおぼると、江戸前の旬の旬の風趣とともに味わうことができる。美味。

これまでは一日置いてセリにかけていた魚を、小田原水揚げの直後に搬送して朝の東京の市場でセリにかけ、当日中に食べられる「小田原を更に出でけん」のしくみも動きだした。

季節の恵みと先人の食の嗜好を合わせ伝えるのが、四季折り折りの旬の食材を生かした「季節料理」。季節なしの冷凍食材への恩恵はそれとして、そんな料理をみずから「厨在丈人」として包丁をとって調理する。「わたしの旬菜」が折り折りの食のシーンを賑わすことになれば、高齢期の人生はいよいよ豊かに楽しいものとなる。

そんなこといまさらと「男厨」を極めた人びとには「耳視目食」を笑われるにとだいないが、それはそれ、ここを通過しないと先にいけない。

で、「旬菜」といえば、当日入荷した食材によって「メニューなし」で供する「旬菜料理」店が増えている。熟練の板前が丹念に調理する場で、片や畑土に配慮して丹精してつくった農作者の工夫を、片や食べごろの獲物を海に追う漁師のこだわりを、菜卓（カウンター）をはさんで語り合うのは、伝承してきた日本の「和食文化」の最良のシーンである。

食は「医食同源」の立場から食材と調理法の蓄積が進んでいる分野である。

といっても昨今のTV料理番組のように、レシピで効能をこだわって、「耳視目食」に陥ることはないし、料理番組はあれほど多彩なのに、味わいの表現が「おいしい」と「うまい」しかないのは、なんとも味気ない。

番組ではNHKの「キッチンが走る」がおもしろい。キッチン車で走りながら現地の食材を探して選んで、有名な料理人が得意料理に仕立てる。これがいずれも「超美味」で、招かれた生産者は試食しながら率直に感激の表現を口にする。

そんな趣向まではともかく、近所の八百屋や魚屋へ行って、主人と話しながら季節を伝える旬の食材をさがして「わたしの旬菜」を仕立てあげればいい。

心待ちして待ち、季節とともに現れる新鮮な素材を求めて自作「わたしの旬菜」を試みる。旬の素材と保存の食材を吟味して「自前薬膳」を考案する。時には朋友を招いて、できたての「自前薬膳」を前に「しずかに新酒の数盞を嘗め、酔って旧詩の一篇を吟じる」(白居易)のもいい。この国の季節の恵みによる贅をつくした食のシーンが楽しめる。高齢男性が「食」を知らないでいては、いつまでたっても女性との長寿の差(平均寿命は女性が八六・六、男性八〇・二)の六歳は縮まらない。

シニア期に入ったら、男性も年齢より若く保つ「アンチ・エイジング」の健康(からだ)のために、志(こころざし)を立てて厨房に入り、調理の腕を振るう(ふるまい)ことにしよう。「体・志・行三つのカテゴリー」の実践の現場となるからだ。

「厨在丈人」として、ここは格好よく形から入ることにしよう。

まずは日本橋・木屋や京都・有次あたりの包丁三丁（出刃・刺身・菜切）を入手する。「銘入り出刃一丁」は頼りになる「高齢化コア用品」である。奥方の無銘包丁や娘の卒業記念包丁の脇に置いておく。それだけでも存在感がある。タイまでは及ばずとも、中型のイナダやシマアジなんかを手際よくおろして供する。「厨在丈人」による月並み一丁といった情景である。

さらに「旬の食材」はみずから用意する。

どこの商店街でも鮮魚店だけはしっかりと営業をつづけているから出向いて仕入れる。今夜の口樂であり生涯にわたる悦樂であるのが食の道樂。味覚とともに調理もまたきわまりなく熟達しつづける「丈人型能力」なのだから、おいに腕を振おうではないか。

同居人が期待するような人気季節メニューがひとつ又ひとつと増え、素材についての能書を合わせれば、口樂の成果は倍になる。

あとは食器、用具の類。これは形や感触が楽しめる専用品となる。自作品を含めて「これはパパのもの」という食器が、食のシーンでの存在感を示す。品性があって柔らかな存在感。費用対効果の高い逸品が探せばいくらでもある。

「厨在丈人」によるキッチンの「高齢化」は、なごやかに形成すべきテーマである。得意料理を得意がつてつくところから入らず、食器の片付けや用具の手入れや調味料の整理あたりから、さりげなくそれとなく構築していくことに秘訣がある。「能ある鷹」として。

「口楽文化人」のたまり場

*「歌う、しゃべる、食べる」三楽がカラオケ文化

「歌う、しゃべる、食べる」（うるる三楽）というのは、口が担う三つの楽しみであり、それを共有するところから「口楽文化」ともいうべきものが生まれる。カラオケは、だれもがそれぞれに、またみんなして、こよなく愛し育てる街の文化であり、カラオケ店は街の文化施設なのである。そのカラオケ店になぜか勢いが無い。すでに衰退の気配すら感じる。

営業実績を保つために、新曲をウリにして若者受けを狙ったり、曲想と関係のない映像を繰り返す。これではカラオケ本家としては恥ずかしい。カラオケ「途上国化」というより本家の衰弱化ではないか。街の文化施設としての「カラオケ」店を街に残すこと。図書館、ファミレス、パチンコ屋に加えて、高齢者の居場所にすることはできるだろう。

ひとことでナツメロというが、戦後日本の歌謡曲は、歌詞も曲も世界に誇るべき「平和文化遺産」である。「平和の証」として歌い継ぎながら、文化施設としてのカラオケ店を支えて、「昭和歌謡全国大会」を毎年開いてはどうか。

平和の証としての戦後の歌謡曲を歌い続けること。

「リンゴの歌」「東京の花売娘」「夜霧のブルース」「港が見える丘」「夢淡き東京」「山小舎の灯」

「星の流れに」「君待てども」「東京ブギウギ」「フランチェスカの鐘」「異国の丘」「湯の町エレジー」「憧れのハワイ航路」「君忘れじのブルース」「東京の屋根の下」「トシコ節」「青い山脈」「銀座カンカン娘」「かよい船」「長崎の鐘」「悲しき口笛」「玄海ブルース」「イヨマンテの夜」「水色のワルツ」「買物ブギ」「東京キッド」「白い花の咲くころ」「越後獅子の唄」・・・
「シニア専用ルーム」(VIPルームではない)があつて、「口楽文化人」がたまり場にして、「うるる三楽」ということになれば、ここは三味一体の「シニア文化圏」となる。

映像にも工夫をこらしたオリジナル曲を選ぶことができ、味覚にも高齢者に配慮した食ダネを揃えて供する。歌の間に料理の話やよもやま話を挿入する。そんなカラオケ店ならシニア世代にとっての与楽効果が満点の町の文化施設となる。認知症予防の効果はいうまでもない。街の「口楽文化」の支え手としてカラオケ店の「うるる構想」に期待しよう。

公立図書館なみに「公立カラオケ館」が各地にあつていいし、地についた文化行政といえるだろう。大都市には「国際カラオケ館」があつて、世界中の歌と料理を集めて外国からの客人をもてなすことができれば、文化技術立国の「口楽文化」の拠点として、国際的評価につながる。高齢社会のための技術を研究開発する「ジェロント・テクノロジ」(ジェロントック)は、ロボットをはじめ開発が急流だが、カラオケは「口楽文化」を日本の「口楽文化人」がリードし、内容を蓄積していく愉快的な国際的貢献の舞台なのである。

「地域型和風住宅」の工夫

*プレハブ技術に地域特性を加味

次は「和風住宅」の部門。

いまでも古都の町屋や各地の古民家として実物がたいせつに保存されているが、わが国の住宅は、古くから「季節感」を巧みに取り込みながら、一年を通じて過ごしやすい工夫をこらしたものだ。風土に適応した住まいといえた。

みなさんもそういう古風な和風住宅を活かした旅荘やレストランや老舗などで、

「風土が息づく住まいの良さ」

を実感したことがあるにちがいない。「常温型エアコン付きプレハブ住宅」に住んでいるうちに、みんながそろって忘れてしまった和風住宅の良さ。

地域に根ざした素材を使い、何代かにわたって使えて、地元の大工さんが修理できた。屋根瓦、壁、間取り。何より風土の特質を活かした「和風民家」の味わい。現代の匠によって、それらを引き継ぐ「モダン変容」の住宅が再現されていることに注目しよう。

本稿ではこれから高齢期をすごす住宅について、二世帯三世代同居の「三同同（三世代同等同居）型」住宅を取り上げた。家族三代それぞれの生活感覚やプライバシーに等しく配慮したもので、ここではさらに季節感にも対応した「三同同四季通風型」住宅を取り上げることにし

たい。実現するにはいろいろな制約があることは百も予見されるが、住宅に対する基本的な考え方として納得しておいてほしいところだからである。

先にも述べたが、「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年に「高齢社会対策基本法」が成立）が出て二〇年になる。「高齢化」にともなう住宅の改良については、国の対策がもっとも進んでいる分野とわかっていい。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

しかし高齢化が急速に進むなかで際立つのが、単身か夫婦のみ世帯用の集合住宅。対策として、バリアフリー構造を持ち、介護・医療と連携して支援するサービスを提供する「サービス付き高齢者向け住宅」（国土交通省住宅局安心居住推進課）が中心となっている。厚労省との共管事業として、事業者への税制上の優遇・補助などを行なっている。

それはそれとして。国の骨組みをささえる重要な単位である家族が長く安心して住む住宅こそ、「長寿社会対応住宅」ではないか。

高齢期の暮らしのための生活空間の形成は、これまでの経緯からいって、和洋折衷の「つくりつけ」の長所の発見からはじまる。

ドアと引き戸や障子、フロアと畳や床の間、ベッドとふとん、イスと座ぶとん、クローゼットと押し入れや天袋、吹き抜け、広い靴脱ぎ、幅広い廊下……。加えて数え切れないさまざま

な電化製品の処遇。そしてテレビとIT機器の個人化。デジタル・デバイド（情報格差）を生まず、家族が暮らしの場を共有するには、仔細な検討が必要になる。

科学技術は、ひとむかし前には、昭和時代の「3C（Car, Cooler, Colour Television）」をもたらした。マイカーは行動範囲を自在にし、クーラーは室温湿度を管理して「安眠」を可能にし、カラーテレビは「知」の領域を広げた。その先に限りない暮らしの技術への夢も。

この国の標準住宅としては、洋風プレハブの全室冷暖房つき「常春型エアコン住宅」が主流となっている。セキュリティができ、機密性が保たれ、常温が得られる住宅構造（すきま風のない家はうれしかった）に。とはいえ、「常春型エアコン住宅」が快適さのすべてではないということを、「三・一一」後の電気事情が知らしめるところとなっている。

「住」にかかわる「和風回帰」とはなにか。

かつて大正時代に和洋折衷の「文化住宅」があった。

和風住宅に洋風の入室をしつらえたもの。いまは常春型エアコン洋風住宅に。この内向的な洋風住宅に、外（庭）に向かって開かれた和室をしつらえる。しっかりと襖、障子、畳、床の間、天井つきの和室を「四季通風」にして。床の間に季節の花を生け、季節の軸を懸けて、日本の伝統とみずからの人生に思いをめぐらす居場所として。通常は「居間」や「客間」としてもいいが、ここは寿終のときを迎える「寿終正寝の間」とすること。この平成「新・和風住宅」の形成が、現代の「住」の和風回帰なのである。

「四季型通風住宅」の工夫

* 外向的に折り折りの風を取り入れる

「常春型エアコン住宅」と「四季型通風住宅」。住宅としてどちらが季節感を繊細に活かしながら暮らせるかはいうまでもない。「常春型エアコン住宅」の一部を「四季型通風住宅」にして使いこなすのが、未来志向の住宅である。

現代技術の成果を活かした太陽光発電を利用し、冷暖房付きにした住宅の一部を「通風型」にすることで、電力を節約し管理しながら季節の変化を享受する暮らしが可能になる。これを可能にするのは、この国に固有の「四季」を時節の基準と考えて暮らすみなさんならお分かりだろうし、だれでもその気になればできるすごし方なのである。

「夏期でんき予報」（東電）を見て、自宅の太陽光発電量を見て、夏の電気使用の判断をしているご家庭があるようだが、それを夏・冬だけでなく四季につなげていけばいい。

内向きに閉じた「常温型住宅」に住んでいけば、だれだって気づかないうちに内向きの思考、指向になる。

そこで「地域の四季」つまり外界と向きあうたたずまいを持った住宅への回帰を試みる。これがこの国の住まい方の本流ではないか。

地方へゆくと、緑地の多い住宅エリアに瓦屋根のしつかりした母屋と新築のプレハブ住宅が同じ敷地内に建てられているのを見かける。

「敷地内隣居」である。

親子二世代の住み分けだから、「三世代同居型」住宅とは異なるが、二世帯の家族同士の「季節感」や「地域性」への関心と配慮が、庭などを通じて外向きに表現されている。このあたりの工夫に、街と住宅の中間領域である庭空間を閉ざさない開放的で外向的な家並みを実現する可能性がみられる。

新築や改築にあたって、個別に工務店側の技術者と、出窓、ベランダ、テラス、バルコニー、庭など、「四季型通風住宅」への細部の検討がなされれば、その成果が共有されて、時をへて和風住宅をつらねた外向きの家並み、家並みが形成されていく。その典型例として「歴史的街並み保存」がなされているが、わが家、わが街での試みがまちづくりの基本である。

人びとが「地域の四季」を時節の基準と意識することで、地域の住空間での「和風の絆」が街並みのひろがりとして見えてくることになる。内向きに閉ざした「常温型住宅」での暮らし方を少しずつ修整して、外向きに工夫をこらしたわが家が増えることによって、三世代が四季それぞれに家の内でも外でも暮らしやすい家、家並み、街並みが姿を現わすことになる。

新幹線の車窓から「地方の四季」を表現する地域特有の「外向的な街並み」が眺められるようになれば、この国は本来の風土の特徴を活かした美しい四季折り折りの景観を回復したとい

えるようになる。後の世代に残したい「長寿社会対応住宅」である。「千里の道も足下から」という。それなら「千戸の街も各戸から」である。一画また一画、「地域の特性」が息づく住宅を作りつづけるよりほかに道はない。

「二五年＝百季」のわが庭を公開する

*「地域の季節」をみんなで楽しむ

季節とともに花のまわり舞台になるわが家の庭、「野外劇場・四季の小ステージ」を演出するのは、いうまでもなく家主のみなさんである。庭木それぞれに四季それぞれのたたずまいがあることを知らないでは演出などできるわけがない。年に一度、植木屋さんに剪定を頼むだけで木の名前も知らない。手入れの大道具・小道具など何もない。これでは街並み参加ができるようにはならない。

そこですばる出演者である庭木それぞれの特徴を知ることから始める。

庭いじりの技の要所を習うことになる。スーパ―の園芸係員も詳しい。自治体の生涯学習や高齢者大学校には必ず「園芸」科があるし、クラブ活動もある。そして頼りになるのが近所の先輩である。

若手の「百季丈人」（高年前期）であるSさんの場合は、隣に住むベテラン「作庭丈人」（高年

後期)」のGさんに習いながら、花期や実入りに配慮した植栽を手がけている。植物が繊細に表現してくれる「二五年〓百季」の庭にひとつずつ迎える「季」を実感しながら。

街並みにかかわる庭木のうち、高木は周囲と合わせて土地にあったものにし、狭いながらも庭は四季折り折りの花の変化、ワビスケ、サザンカ、紅・白梅、椿、桃、ヨシノ桜・八重桜、牡丹、サルスベリ、バラ・・・。

こんな家並みの街なら紛れ込んだ旅人も安心して時をすごし、思い出を得て立ち去ることだろう。穏やかに風物が息づく街だからである。

もちろんその例はさいたま市盆栽町などにみられる。「盆栽美術館」もあるから行って紛れてみるとよい。

全国地域には「季節の花」が名所になっているところは数知れない。

多くは観光協会などが管理にあたっているようだが、梅や桜の名所は全国的に分布している。それとともに、寺院や個人の持つ庭園が「季節の花」のころに入場料をとって公開されて、「地域の季節」を楽しむ人びとに支持されている。梅、桃、牡丹、菖蒲、薔薇、紫陽花、藤、菊などの「わが庭の公開」が次々に話題になる。果樹の場合には摘果による楽しみが加わる。

豊かな四季の変化を地域のみんなで楽しんですごす。穏やかに移ろう「天恵」とともにある「地域の四季」の晴れ舞台ではないか。

三 中心街は「三代四季の情報源」

変幻自在な商品流通のゆくえ

*夜はコンビニの明かりが頼り

「みんなに親しまれる商店街」

という横断キャッチフレーズが、いままもM市駅前通りの入り口に掲げられている。

が、シャッターを下ろした店舗が目立つ商店街からは活気が間引かれていて、こちらの親しむ気持ちも間引かれる。つい先ごろまであれほど住民に親しまれていた商店街だったのに・・・。

「ここまでさびれちまった商店街にもう未練ないね」

と通りすがりの人から言い放たれるのが、一般的。

「シャッター通りには期待しない、コンビニとスーパーがありやいいじゃんか」

と若者から無視されるのが、風潮。

たしかに訪れても、親しめる人がいなくなった商店街は、歩いていても楽しくない。「駅前通り」は、駅から市役所への往復の道でしかない。残っている店に吸引力がない。こうないないづくしの街では、歩いていてもやりきれない。それでもさびれの底を打った感もないではない。街路の底が動く気配がしないでもない。

ものを買うだけなら、家にいたってできる。インターネットの「電子モール（商店街。楽天やamazon）」で何万件もの商品に出会える。購入品はクリックするだけで、明日にもクロネコヤマトか佐川急便で宅配される。ほかにテレビ・ショッピングや通販もある。クルマで市外に出れば、バイパス沿いにケバケバ広告の大型スーパーやちよつと休めるファストフード店があり、町なかには駐車場設備のあるコンビニが網をはっている。

スーパーの明かりが消え、パチンコ屋の営業が終わり、最終電車が着いて駅舎に人が動かなくなつたあと、なお明かりがつづく二四時間営業のセブンイレブンやファミリーマートやローソンは、頼りになる生活支援の拠点なのである。やや親しみに欠ける警察や頼りがいのない宿直員だけの役所よりはずっと。

変幻自在な商品流通の包囲網。そのなかで駅から旧市街へと通じるM市駅前通り商店街は、じわりじわりとさびれるにまかされてきた。再生への自助努力はしても、契機もないままに商店街はどこも成り行きにまかされてきたように見える。利用者や歩行者には見えない必死の内部分努力をした末のこととして。

移動がクルマ中心になるころはマツクの店がどんどん増えた。その後、日用品が国産から安価な途上国製品になるという「グローバル化」がすすんでスーパーが増えた。長く住民に親しまれてきた商店街は求心力を失い、地元資本の大型店までが消えていった。国産の優良品を扱う店がなくなり、途上国産の廉価粗悪品を扱うスーパーに変わったが、とって日用品に途切

れが生じたわけではなかった。

生活感性の高い中・高年者はひとしきり粗悪品で我慢することになったが、ふつうに使えて安ければそれで我慢はできる。なんといつても敗戦後の貧しさを知る高年者は我慢強い。

それがアジアで先行して豊かになったわが国に、アジアの民衆の暮らしが追いつくプロセスであると思えば、文句はいうが我慢できるのである。

「モノと暮らしの情報源」だった商店街

*「地域の顔」も店じまいしたシャツター街

M市駅前通りに限ったことではないが、懸命な自助努力にもかかわらず「シャツター街」になつてしまったのは、「ガイアツ」に屈したからである。

貿易不均衡によるアメリカでの日本製品たたき（アメリカで日本車が壊されたり燃やされたりした）があり、日米構造協議があり、「大規模小売店舗法」改正（一九九一年）からはじまつた「まちこわし」（商店街シャツター通り化）は、いまやアメリカ商品より途上国製品を売りまくるスーパーの徘徊・跋扈で極まっている。

商店街をまるごと取り込んでしまうような大型ショッピングセンター、モールまで登場。旧来の商店街・流通網では守るにも攻めるにも手立てはない。だがスーパー商法は、生活感性が

高く優れた日用品を求める消費者から見放され、行き着く先は見えている。マックが赤字になり二四時間だった明かりを消し、コンビニが出来たり消えたりし、同時にからだに感じられる程の微震だが、地産品で確実に商店街が動き出している。

小売店のピークは一九八二年だったという。そのころは全国に一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所あったという。商店街の数もそうだが、街に人をひきつける活気と魅力があった。

商品ばかりか人生の先達があちこちにいて、元氣も知識もそして割引もしてもらえたのである。歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であったまちの中心街の崩壊が、二〇〇三〇年で住民から何を奪い、何をもたらしたのかはみんなが記憶している、そして二〇〇三〇年後に何が必要とされるのかも。

再生への努力はさまざまに試みられているが、後継者のことまでを考慮にいれると、なお頑張って営業をつづけている江戸創業の老舗といえども猶予はない段階にある。

明らかな「構造の問題」だったから、店主の努力では太刀打ちできなかった。

まず細々と商いをしていた小売店で儲けが出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失って後継者がいなくなった。原因は店主の才覚の有無に封じこめられ、店主は煤を払った神棚にむかって、何代目かとして創業の先人に不明をわびながら店を閉じたのだった。

自家用車が増え、じわりじわりと鉄道客やバス客が減りつづけ、商店の店じまいの時間が早くなった。それとともに商店街に防犯用シャツターが増えた。シャツターに絵を描いたりした

が、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのはまず商店街のほうだった。めっきり人通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなった。

「え、あの店も？」といった話題になりながら、中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた地元資本の古手商店までが、消えていった。

まことに惜しまれるが、もはや再生が不可能な商店もふくまれている。その中には江戸期からの歴史を持ち、「地域の顔」を支えていた特産品の老舗が含まれる。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店や、呉服・家具といった伝統品を商っていた有名老舗までが次々に看板を下ろしていったのである。

地道に地方出版を手がけて、地域文化の拠点だった老舗書店も、大型店舗の駅前出店のあと、しばらくしてひっそり灯りを消していったのだった。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、たとえば宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といった有名店舗の経営不振が伝えられるのち前後して、M市でも地元資本の有名百貨店と家具店が同じころに倒産した。市民に商品流通の変貌と再開の不可能なことを決定的に納得させることになった。

三〇年でこうも変わるものか。

ではこれから三〇年でどうすればいいのか。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

*歩行圏の中心街に集う高齢者と子ども

全国のまちづくりの中に、「歩くまち」をテーマとしている都市がある。

秩父市、倉敷市、安来市などがそう。高齢社会への移行を見越して、「買い物空間にとどまらず、心地よく歩いてすごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モール化する都市もある。車で訪ねて歩いて成果を見てこよう。

ライド・アンド・ウォークでいい。「車行」と「歩行」の使い分けスタイルである。

富山市ではじめた歩行補助車「富山まちなかカート」は、高齢者が歩いて出かけるのを支える試みとしてすすめられ、「歩行圏コミュニティ」を実現しようとしている。

地域のまちの中心街は「歩行生活圏」として構想し、「車行生活圏」との使い分けを明解にする必要がある。

想定される「歩行生活圏」のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いたれた生活小物や茶菓を購入し、店主や出会った知人と語り、暮らしの情報源としている高齢者。そして日用の買い物と街なか会議をする女性たち。そして安全な「居場所」でスポーツやゲームや読書や芸能を楽しむ子どもたちである。

「街に子どもの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」

とM市駅前通り商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加しているUさんは熱意をこめてそう語る。

テーマは「街ごとステージ」化である。

そこは日課としてやってくる元気な高齢期の人びとと子どもたちがいっしょにすごせる「歩行生活圏」での出会いの場となる。学校や役所や「図書館」ほかの公共施設や「地域包括支援センター」なども至近の距離にある。

まちの中心街（商店街）は、高齢者同士が、祖父母と孫が、母と子が、女性同士が、安心して買い物やおしゃべりや居場所としてすごせる「世代交流のステージ」である。

大事なテーマに子どもたちの安全な居場所づくりがある。

たとえば野外なら遊具を固定せず子どものアイデアで変化させる児童公園（まっ白い広場づくりなど）がある。屋内なら「一八歳以上お断り」といった「ブック&ゲーム・センター」。後者なら好きな本やハイテクのメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しむ。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、まちを活性化する中心街の重要なテーマである。

こども園や小学校を終えて、塾がよいなどのほかに、週に何日かはこういう街なかの施設で仲間と夢中ですごす道くさも養育の過程ではたいせつなのではないか。

「三代四季型中心街」をめざす

*日課にする人の「買い物十遊歩空間」

まちづくりの中に「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがある。「わがまち」を論じるとともに、一歩進んだそういう街を訪ねて歩いてみるのもいい。

中心街でもある商店街の催事は、これまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけだった。それに春秋を立てて季節ごとの「四季の催事」として構成し直す。住民が季節ごとに街空間の変化を楽しみにしてくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるような「四季のステージ」、季節語を先取りする「ステージ」の演出に、商店街の賑わいを取り戻す契機がある。

その演出者は地元の「街元氣リーダー」（経済産業省）である商店主と高齢住民が担う。二季型から四季型へ。そしてさらにみんなが集う先駆的な「三代四季型中心街」へ。

「三代四季型中心街、生き残りはこれですよ、Uさん」

しかし萎縮（デフレーション）した商店会を元気にする立場にいるはずのUさんは、理屈としてはわかるが、年二回でさえもすぐ次がやってくるというのに「年に四度はムリ」という。「ムリして二度ではなく、ムリなく四度です」

地域の隅々をよく知る「*地識人」のみんながお手伝いして「季節ごと四つのわがまちの景

観」を街空間に取り込んで賑いと呼び戻すのだから、といってもUさんは首をタテに振れない。

M市駅前通りは中心街活性化の先陣を務められそうにない。

四季折り折りの地域の風物を取り込んだ春・夏（中元）・秋・冬（歳末・新年）を表現する季節ごとの装飾をほどこすのにムリはないのに。

「三代四季型中心街（商店街）」の演出のために、わがまちの歴史・伝統、産物、風物、人物、芸能、技能といった「地域特性」に目を配り、「わが中心街」の演出として取り込む。こんなまちづくりをわが人生と重ねる高齢者なら、呼びかければいくらでもいる。

商店街の役割はなんだったか。

地元住民が暮らして必要とする商品を頼めば手にはいるユーザー優先の流通である。

そういう要望を取り入れた新たな流通拠点が、地元生産者と商店会と商店主と高齢住民が協議して運営する「地域流通スクエア」といった形態の「みんなのためのおみせ」である。

「カオが見える流通」の拠点であり、商品性の高い「地場（季節）商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない「超スーパー・コンビニ商品」を提供し、サービスで地域の人びとの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、住民からの注文と配達を一手に引き受けてくれる。自治体、地域包括支援センターとも対応して介護者への物品の配達などもおこなう。

地元住民が必要とする商店、公共機関・施設の情報をネットでむすんだ「中心街の中心核」

として、「地域流通スクエア」のような施設を成功させることができるかどうか。

そういう「情報源としてのみんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間営業の「超（スーパー）・スーパー」機能をもつ頼りになる流通拠点が登場する。

ここで「歩行生活圏」の「三代四季型中心街（商店街）」のようすを画いてみよう。

町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街にも色濃く反映される。地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事が公開され広報される。そして次の季節の訪れが待たれるステージの予告、それが「三代四季型中心街（商店街）」である。

そういう姿になれば、地産（季節）商品中心の「わが街の商店街」が「歩行生活圏」に再生され、スーパー型途上国産品中心の「車行生活圏」と共存することになる。

「商店街って、おもしろいじゃん」

と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちが言うだろう。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人とひとしきり気軽に談話を楽しみ、ケーキ屋のテラスで一杯のコーヒーと店自慢の自家製ケーキで手造りの味を味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子で「甘余の味」を味わう。

「和風街着」で訪れて、ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなでつくるそんな「三代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。